

保護者と子どもがうまく関わるための「遊び方」の提供を含めたあそび内容の考案

中部学院大学短期大学部 幼児教育学科 2年 子ども家庭支援コース 有川ゼミ

1. 目的

地域の子どもの遊び場、遊びの機会の減少が懸念される中、子どもたちにこれらを提供するために、私たちは2011年度から「各務原市川島ライフデザインセンター前期長期講座『遊びの基地』」をゼミナール活動として継続的に担当してきた。その中で「親子で楽しむ機会としたい」という参加者からのニーズに応えるために、特に一昨年度と昨年度については本事業による補助を受けながら明確なテーマを掲げて実践を行い、親子で楽しむために必要なポイントを明らかにすることができた。昨年度は工作系のあそびと活動系のあそびを組み合わせることについて検討し、子どもは自らの手で作った愛着ある工作物を使って遊ぶことで集中して遊ぶことができるようになり、一方で保護者は親子で徹底的に遊ぶことで普段とは違った子どもとの関わりができるようになることが推察された。このことから、保護者を子どものあそびに引き込む1つの方法として、活動系のあそびの「遊び方（＝子どもとの関わり方）」の提供が有効であることが考えられた。

そこで今年度は、保護者と子どもがうまく関わるための「遊び方」を提供することを特に重視して講座の展開を試み、その成果を子育て支援活動を発展させるポイントとして提案することを目的とする。

2. 方法

実施した講座について：

平成27年度各務原市川島ライフデザインセンター前期長期講座「遊びの基地」講座（開催回数：6回、開催時間：土曜日 10:00～11:30）にて、受講者43名（3歳～小学2年生の子ども）とその保護者に対し、昨年度までと同様に、私たち学生が主体となってあそびのブースを企画し、展開した。

実施した内容について：

昨年度までの成果を踏まえ、保護者をあそびに引き込むために「保護者が普段できないような内容や新たな発見が得られる内容」を基調とし、保護者に時間的・心理的余裕を提供できるようなあそびのブース数（3つ）・工作系のあそびの難易度とした。また、今年度は特に活動系のあそびに重点を置き、親子が関わり合いながら実施できるあそびを考案し、その「遊び方」を提供することとした。

評価について：

本活動による成果の評価は、行動観察による保護者と子どもとの関わり方の変化と、各回に実施した保護者アンケートの分析に基づいて行った。

3. 結果および考察

a. 個々のあそびのブースの展開からの分析

自分だけのオリジナルけん玉をつくろう！（工作系+活動系）（第1回目）に実施）

自由にデコレーションした紙コップと新聞紙で作ったボールを毛糸でつなぎ、簡単なけん玉を作った。これに加えて、このけん玉の特徴を活かして独自に考案した様々な技を実演し、親子でチャレンジしてもらった。工作については、説明書を渡した上でその解説を行ったため、親子ともスムーズに製作を行うことができた。技へのチャレンジについて



は、最初は子どもだけで行っていたが、私たちが一緒にチャレンジし盛り上げていくと、子どもが少しずつ難易度の高い技に取り組むようになっていった。これに伴い、保護者も一緒にチャレンジする姿が見られるようになった。私たちでも少し難しい技を考案して実演することで、子どもは目を輝かせてチャレンジし、保護者にも興味を持ってもらえることを実感した。保護者アンケートには、「けん玉のブースの学生さんは、すごく子どもを盛り上げてくれて、けん玉のやり方を子どもに合わせて教えてもらえて良かったです。」「子どもたちにわかりやすく説明してもらえて、作業もスムーズにできました。」との肯定的な感想が多かった。

親子で対決 輪投げあそび！（工作系+活動系）（第4回目に実施）

新聞紙をねじってガムテープで止めるだけのシンプルな輪を作ってもらい、これを使って親子で輪投げをしてもらった。輪投げのルールについてもシンプルなものとし、色水の入ったペットボトルを的として「輪が入ったら色テープを1枚自分の輪に巻いてもらえる」という“ご褒美ルール”を作った。これに子どもたちは強く反応し、何度も何度も挑戦して自分の輪を色テープでいっぱいにしていった。自分の頑張った結果が形として残ることが嬉しいようで、私たちや保護者に自慢する姿が多く見られた。また、私たちのメンバーの1人は幼稚園での実習中にも同様の内容を行ったが、その時よりも子どもたちの上達が早く、より熱中しているように感じられた。親子の関わり方を観察していると、親子で対決していく中で、子どもは保護者の投げ方をじっくり観察しており、それを手本としながら上達していく様子が見られた。よって、今回のあそび内容は親子の関わりを促す効果があったと考えられた。保護者アンケートには、「シンプルでわかりやすく、たくさん楽しめました。」「たくさんシールをもらいたくて、何回も挑戦していました。」「家でもやってみたいと喜んでいました。」との感想があり、満足していただけたことが考えられた。



幼稚園での実習中にも同様の内容を行ったが、その時よりも子どもたちの上達が早く、より熱中しているように感じられた。親子の関わり方を観察していると、親子で対決していく中で、子どもは保護者の投げ方をじっくり観察しており、それを手本としながら上達していく様子が見られた。よって、今回のあそび内容は親子の関わりを促す効果があったと考えられた。保護者アンケートには、「シンプルでわかりやすく、たくさん楽しめました。」「たくさんシールをもらいたくて、何回も挑戦していました。」「家でもやってみたいと喜んでいました。」との感想があり、満足していただけたことが考えられた。

b. 保護者アンケートからの分析

アンケートの自由記述に「普段仕事が忙しく子どもになかなか関わる機会がないが、今回色々なあそびを教えてもらう中で関わられたので良かった」というある父親のコメントもあり、「遊び方」の提供を通して「親子が関わる機会」を提供するという試みがある程度成功したことが考えられた。また、今年度は「家でもやってみたいと思った」というコメントが特に多く、「遊び方（＝あそびを通した親子の関わり方）」を保護者に実感していただけたからこそその結果ではないかと思われた。各回に実施した保護者アンケートにおける子どもおよび保護者の満足度（図1）（本原稿提出時には5回目・6回目が未実施）が例年になく高い満足度で推移していることからこのことが窺えた。

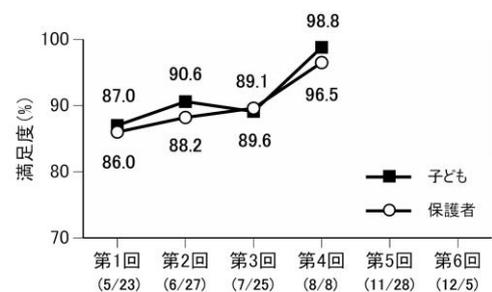


図1 子どもおよび保護者の満足度

4. まとめ・本成果を踏まえた提案

今年度の取り組みでは、活動系のあそびに重点を置いて講座を展開した結果、「遊び方」を提供することで「親子が関わる機会」を導く可能性があると考えられた。私たちが実施しているようなイベント型の子育て支援活動の場合、限られた短い時間の中で親子が関わる機会を多く作り出すことが大切である。また、これをきっかけにして、それぞれの家庭でも親子が関わる機会が増えることを期待している。よって、子育て支援活動を発展させる1つのポイントとして、「保護者が子どもと一緒に遊んでみたくなるような「遊び方」の提供」を提案したい。